

## 『実学報』における日本の新聞記事の翻訳について

——『中外商業新報』掲載「廣東金礦の發見」を例に

陳 静静<sup>1</sup>

### はじめに

甲午戦争（日清戦争）後、中国では近代文明を取り入れるために、「同文」である日本からのルートが近道だと認識されていた。日本に留学生を派遣したり、日本書籍を翻訳したり、日本人を雇ったりするなど、様々な方法が実施されていた。日本及び世界の最新情報を知るには、日本の新聞記事を中国語に翻訳することが最も近道だったのだろう。

実際に、中国では漢文の定期刊行物の発行は 1815 年の『察世俗毎月統記傳』から始まった。但しそれは中国人に読ませるために西洋人が主となって編集したものであり、中国人は受動的にこれを手伝っただけである。故に、それを充分利用するまでにはならなかった。他方、日本は中国を真似て新しい新聞を作り出した<sup>2</sup>。中国人自身による最初の雑誌<sup>3</sup>は 1896 年の『時務報』であり、日本人の手によって日本の新聞記事が中国語に訳され、中国国内で広まった。沈ほか（1998）は「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初」と指摘している。594 本の日本の新聞記事が日本人漢学者古城貞吉によって訳され、「東文報訳」欄に掲載された。『実学報』はその翌年 1897 年に刊行され、「東報輯訳」「東報訳補」欄を設け、日本語の記事を中国人に依頼して翻訳・掲載した。『時務報』の翌年に発行されたため、日本の新聞記事を紹介するための比較的早い時期の新聞である。

『実学報』には日本の新聞記事の訳文が 139 本あり、そのうち広東省にある金鉱の發見を内容とする二人の訳者による訳文が掲載されている。2 本の訳文の所在情報は次の通りである。

「廣東金礦發見」	第六冊/363-364 頁	吳縣孫福保譯	東報輯譯欄
「廣東金礦之發見」	第十四冊/873-874 頁	長洲程起鵬譯	東報譯補欄 <sup>4</sup>

両訳文の題目の下には「譯中外商業新報西九月十四日」とソースの日本の新聞原文出典も明

<sup>1</sup> 北海道大学・文学研究科・博士後期課程

<sup>2</sup> 日本では幕末の文久期（1861-1864）のころ、中国の漢字紙、たとえば『中外新報』『六合叢談』『香港新聞』『中外雜誌』を翻刻した。明治元年には、『中外新聞』『日日新聞』『江湖新聞』『内外新聞』など二十種ばかりの新聞紙が、何れも日本人自身の資本で、日本人自身の手によって発行された（実藤 1940 : 150-151 参照）。

<sup>3</sup> 実藤（1940）で『時務報』を中国人による最初の雑誌とされ、当時の雑誌と新聞の区別はあまりなかったため、本稿ではこの呼称を引き継いだ。

<sup>4</sup> 本稿はできるだけ原文に近い字体で入力する方針である。以下同様。

記している。よって日本語の原文記事は明治30年9月14日の『中外商業新報』2頁に掲載されている「廣東金礦の發見」であることが分かった<sup>5</sup>。139本の訳文のうち同じソースを元にしたのはこの2本のみであり、この重複には次のような理由が考えられる。①「廣東金礦の發見」という記事を読者に繰り返し読ませる重要性。②教養の違う読者層のために、わざと同じ日本語新聞記事を二人の訳者に翻訳させる必要性。③職員の校閲不足による重複。刊行当時の具体的な状況についてはいまだはっきり分らないが、このような重複が当時の中国人訳者の翻訳に対する態度、訳し方の相違点や、日本の新聞の中国語翻訳に対する方針などを見るために重要な資料になると考えられる。

筆者は、まず日本の新聞『中外商業新報』の記事と孫福保・程起鵬の中国語訳を照合し、日本の新聞記事とその中国語訳における漢字表現、語彙表現と文のレベルで比較、分析する。更に、二人の中国人訳者による翻訳の特徴を分析したい。

## 1 『実学報』と『中外商業新報』

本節では『実学報』とそのソース記事を掲載した『中外商業新報』を紹介する。

『実学報』(旬刊)は、1897年8月に上海で創刊され、1898年1月まで計14冊が発行された。第二冊から「東報輯訳」欄を設け、第九冊からは「東報訳補」欄を増加し、第十二冊から「東報訳補」欄だけを残した。訳者に関しては、第二、三冊は「福建王宗海口訳、呉県王仁俊筆述」、第四、五冊は「福建王宗海口訳、呉県孫福保筆述」の形で、第六冊から第十一冊までは呉県孫福保、第九冊から第十四冊までは長洲程起鵬を東文訳者として起用した。初期段階は「口訳、筆述」の共同作業で、筆述者が口訳者の述べたことを文字化する仕事であるが、文字の選択や語彙の使用にある程度主動権を持っている。冊毎における訳文の掲載数は表1にまとめる。

表1:『実学報』における日本の新聞記事の中国語訳の掲載数

所在冊 訳者	所在冊													
	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	合計
福建王宗海(口訳) 呉県王仁俊(筆述)	9	5												14
福建王宗海(口訳) 呉県孫福保(筆述)			13	12										25
呉県孫福保					12	9	8	7	3	4				43
長洲程起鵬								7	9	4	17	15	5	57
合計(本)	9	5	13	12	12	9	8	14	12	8	17	15	5	139

掲載記事の内容から見ると、「廣東金礦之發見」「清國於居留外國人及商店之數」のような「中

<sup>5</sup> このほか、『東京朝日新聞』1897年9月15日2頁に掲載された「廣東の金礦發見」と『時事新報』1897年9月14日2頁に掲載された「廣東金礦の發見」と非常に類似した記事も見つかった。

国時務」に関する記事が 32 本、「日本製茶出口表」「巴西土匪内變」のような「外国時務」に関する記事が 107 本ある。ソースとなる記事の掲載新聞は多い順に挙げると、『時事新報』(35 本)、『大阪朝日新聞』(34 本)、『東京日日新聞』(25 本)、『中外商業新報』(13 本)、『大阪毎日新聞』(10 本)、『東京経済雑誌』(9 本)、『神戸又新日報』(9 本)、『東京朝日新聞』(2 本)、『日本』(1 本)<sup>6</sup>である。

『中外商業新報』(日刊)は、1889(明治 22)年 1 月 27 日創刊、1942(昭和 17)年 10 月 31 日廃刊の経済新聞である。前身は『中外物価新報』で、現在の『日本経済新聞』である。『毎日新聞』『東京日日新聞』『報知新聞』『読売新聞』と合わせて、明治 30 年代の東京の主要新聞の一つである<sup>7</sup>。『実学報』は 14 本の翻訳記事が『中外商業新報』に由来している。ところで、『中外商業新報』は『大阪朝日新聞』『時事新報』『東京日日新聞』に続き、4 番目に『実学報』に多くソースを提供している日本語の新聞である。14 本の訳文に関する情報は表 2 の通りである。

表 2:『実学報』に掲載された『中外商業新報』に由来する翻訳記事リスト

番号	記事名(中国語)	所在冊	記事名(日本語)	出典記録
1	廣東金礦發見	六	廣東金礦の發見	中外商業新報西 9 月 14 日
2	八重山群島開拓之好望	七	八重山群嶋開拓の好望	中外商業新報西 9 月 25 日
3	視察倉庫	九	倉庫業視察談	中外商業新報西 9 月 25 日
4	德國大水	九	獨逸の大洪水	中外商業新報西 9 月 17 日
5	濠州物産	九	濠洲タンズビルの事情	中外商業報西 9 月 25 日
6	松方入仕内閣之一週年	十	松方内閣の一週年	中外商業新報西 9 月 19 日
7	凶漢横行	十二	兇漢暴行	中外商業新報西 9 月 25 日
8	日本増加郵便電信税	十二	郵便電信料引上と鐵道運賃引上	中外商業新報西 9 月 28 日
9	關東於製鹽業之計劃	十二	關東に於ける製鹽業の計畫	中外商業新報西 9 月 26 日
10	日本禁止圓銀通用及短縮改換限期	十二	円銀通用禁止と引換期限短縮	中外商業新報西 9 月 26 日
11	上海整理棉花事業	十三	上海に於ける棉花荷造改良事業	中外商業新報西 9 月 14 日

<sup>6</sup> 出典の不明や出典の誤記があるため、筆者が再度調査をした。詳しくは陳(2017)を参照されたい。

<sup>7</sup> 西田(1961:237)による。

12	視察西比利亞地方茶業	十四	西比利亞地方茶業視察の結果（再び）	中外商業新報西9月25日
13	清國之大炭田	十四	清國に於ける大炭田	中外商業新報西9月14日
14	廣東金鑛之發見	十四	廣東金鑛の發見	中外商業新報西9月14日

上記14本のうち「中国時務」に関する記事が5本、「外国時務」に関する記事が9本ある。ソース記事の刊行時期から見ると、明治30年9月14日から28日までの間に集中している。当時日本の新聞が入手しにくい状況が見て取れるだろう。

## 2 先行研究

朱（2015）は『時務報』『清議報』の研究に続き、『訳書彙編』を研究対象に取り上げ、中日同形語を抽出し、それを「中国語古典にある語」「近代に新義が付与された語」「中国語古典にない語」「漢語大詞典未収録語」の4種類に分け、2字漢語を中心に分析した。氏は『時務報』『清議報』の各種類の語数との比較も行っているが、中日同形語の抽出段階においては日本語原文とあまり比較しておらず、辞書や朱氏個人の語感に基づく判断が混じっているようである。

秦（2008）は『東京日日新聞』に掲載された日本語記事「清国膠州湾」を取り上げ、『時務報』の古城貞吉と『実学报』の程起鵬による2本の中国語訳文を原文と対照し、古城氏と程氏の新漢字語の使用状況、訳文と原文との関わり、両氏の訳し方、翻訳の正確性などを分析している。両誌には「軍港」「外交官」「技師」などの新漢字語の使用が確認でき、程氏が原誌の日本語記事の語彙を忠実に使用しているが、漢文に造詣の深い古城氏の方がより正確な翻訳であることを明らかにしている。

両氏の論文を手がかりに、筆者は『実学报』に掲載された日本語記事を同一とする孫福保・程起鵬両氏の中国語訳の記事を研究対象として、日本語原文と中国語訳を対照しながら、朱・秦両氏が言及していない当時の中国と日本の新聞用漢字を検証したい。更に、中日同形語の観点から分析したい。

## 3 漢字表現レベルの考察

孫福保・程起鵬両氏の中国語訳文と日本語記事の内容を対照すると、語彙的差異のほか、漢字表現の面でも異なるところがある。原文と訳文の間のみでなく、両訳文の間でも漢字表現に差異がある。従って、日本語と中国語の漢字表現に見える差異には、当時の中国の新聞における漢字の使用状況などが伺える。当時の中国と日本がともに旧字体を使用していたことは周知のことであるが、漢字表現の差異が語形の異同判定にも影響する可能性がある。従って、まず漢字表現の差異を明確にする。本節では、次の5組の漢字表現におけるずれを挙げて説明する。各漢字の字体注記、意義などを考察する際、中国語側は『大広益会玉篇』『康熙字典』、日本語側は『大漢和辞典』『大字典』などを利用した。

表 3：二者の訳文と日本語原文における漢字表現の異同

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
礦	礦	礦、鑛
湧	涌	涌
驗	驗	驗
資	資	資
圓、元	圓	弗

## (1) 異体字と俗字の使用

まず、「礦」と「鑛」を例に、中国語訳では全部「礦」で、日本語原文では「礦」(3ヶ所)、「鑛」(2ヶ所) 両方を用いている。しかも、「礦山」「金礦」「金鑛脈」のように、区別なく混用されている傾向がある。「礦」「鑛」について辞書を調べると、その記述は次のようである。(下線は筆者による。以下同様。)

『大広益会玉篇』:

礦：古猛切、強也、銅鐵璞也<sup>8</sup>

鑛：古猛切、鑛鐵也

『大広益会玉篇』では、「礦」の意味は上の字「礦」と同じで、「鑛」の字体注がなく、ただ「礦」の義注とほぼ同じであるため、3文字が異体字かどうかについては触れていない。さらに『一切経音義』で確認したら、「鉶」と「礦」が「鑛」や「鑛」とも書ける<sup>9</sup>ので、「礦」と「鑛」は異体字として使用されていることが分かる。

『大字典』:

礦：8081①アラガネ(名) ②石ノ名 礦 鑛同字

字源：形聲。もと礦とかく 銅鐵等の未だ石と混じたるもの アラガネ。故に石扁。廣(クワウ)は音符。今は又金扁にもかく。熟語は鑛(12672)を見よ。

鑛：12672 礦に同じ。

日本語側の『大字典』では同字だと明記しており、「鑛」はもともと「礦」と書くが、今は「鑛」とも書くことが分かった。熟語10語(鑛山、鑛夫、鑛水、鑛石、鑛物、鑛床、鑛泉、鑛毒、鑛脈、鑛區)が「鑛」の項目の下に挙げられているように、当時「礦」と「鑛」は異体字として併用されたが、「鑛」に偏って、現代になって「鉵」に統一されたのではないかと思われる。一方、翻訳する際、両氏がともに「鑛」を「礦」に直し、現代中国語でも「礦(矿)」に統一され

<sup>8</sup> 原文は「同上」となっているが、便宜上「礦」の字の注文を記した。

<sup>9</sup> 『一切経音義』に「寶：下猛反、考聲。銅等璞也。鄭注周禮、金玉未成器也。亦從卬、從金、卬音、古患反。或作鑛、或從石、作礦、並通用也」、「金礦：古猛反、說文銅鐵璞石也。從石黃聲也。鄭玄璞石也、云金玉在石未銷鍊、曰鑛。又作研礦、並同」とある。(「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」より。)

るのと繋がっていると思われる。

中国語と日本語でも異体字とされているため、本論で考察する際、同じ字だと認識する。ただ孫福保と程起鵬は同じ「礦」を用い、原文記事は「礦」と「鑛」両方を用いた。異体字とされた「礦」と「鑛」は日本語で「鑛」、中国語で「礦」と別れてくる傾向が見られるだろう。

上記の方法で、「湧」と「涌」は中日両方の辞書とも異体字の注記があるので、同じ字だとする。「賁」と「資」は、『康熙字典』に「賁」が「資」の異体字だという記述があるが、現代中国語では「資産」「資費」「資本」のように「資」に統一されている。日本語側の『大字典』には字体の注記がないが、義注が同じであるため、同じ字だとする。訳文では、孫福保は「湧」「賁」を用い、程起鵬は原文記事と同じ「涌」「資」を用いた。

また、『康熙字典』では「驗」が「俗驗字」とあって、「驗」の俗字だとする。日本の『大字典』には両方とも収録され、『康熙字典』と同じ内容が記録されている上に、現代日本語で常用する「驗」が「驗」の略字であることも述べられている。訳文では、孫福保は俗字体を用いたのに対して、程起鵬は原文記事と同じ「驗」を用いた。

つまり、日本語原文の「鑛」と違って、孫氏と程氏が「礦」を用いた。そして、程氏が日本語の原文通りに「涌」「驗」「資」を、孫氏が俗字「湧」「賁」を用いた。

## (2) 外来語の漢字表記の翻訳

通貨の単位として、旧字体「圓」は現代中国語では「圓」で、貨幣に印刷されていて、普段は「元」を使用する。「弗」はアメリカ、カナダ、オーストラリア、シンガポールなどの通貨単位のドルに当てられるもので、多くはアメリカドルのことをいう。中国ではこの用法がない。外来語ドルの当て字「弗」の訳語として、程氏が「圓」を、孫氏が「圓、元」を使用した。

それでは、「圓」と「元」を見てみよう。二者の訳文では貨幣の単位を表す数詞「圓、元」両方とも使用されていた。範囲を広げて翻訳記事の用字選択を考察すれば、『実学報』の他の記事でも同じ傾向が見られる。例えば、「台湾現存鉄路進欸」では日本語原文の「圓」10ヶ所を「元」にし、「予算増税」では「圓」にした。一方、『実学報』の定価として「每冊取紙印費洋一角五分、定全年者洋四元五角、先付者四元、郵局費另加（每冊紙と印刷費洋銀一角五分取り、一年分予約すれば四元五角で、前払いは四元で、輸送料は別である）と2冊目から表紙に印刷されている。そして、「本館告白」の「本館附書目」に挙げられている書籍の定価も全て「朱子年譜四本二元 一切経音義一元二角」のように「元」を使用していた。

以上のように、翻訳する際、程氏は日本語の字形を継承する傾向があるのに対し、孫氏は俗字や異体字を使用する傾向がある。日本語原文の「鑛」「弗」を用いず、両氏とも中国で通用するものを用いた。程氏と孫氏が俗字、異体字を併用するのは、当時の中日両国の新聞の用字に関する特徴であるとも考えられる。また、このような漢字の使用状況は現代日本語の「鈺」と

中国語の「矿」へと変化する過程でもあったと言える。

#### 4 語彙表現レベルの考察

前節で漢字表現上の差異をクリアにしたところ、「試験」「試験」「試驗」などは同形語と判定できる。本節では語彙表現の面から考察する。語の抽出方法として、日本語原文と孫福保・程起鵬両氏の訳文を照合し、同じ語形を持つものを抽出する。抽出語としては2字熟語が中心であるが、訳文と原文の対応や文脈から一つのまとまりとして分けられないほうがよい句も対象に入れる(例えば、「礦山技師」と「礦師」、「鑛一擔に付き」と「一擔金砂」「每鑛一擔」)。なお、人名(「莊鶴清」など)、地名(「蒼梧縣」など)は除外する。

##### 4.1 二者の訳文が原文と一致する語

原文と二者の訳文でともに用いられた同形語は表4の通り、計12語ある。「試験」「委員」を例として具体的に見てみよう。

表4: 二者の訳文が原文と一致する語

省城、鉱務、涌流、発見、試験、最下、計画、委員、連亘、地方、一帯、金鉱
-------------------------------------

##### (1) 「試験」

「試験」について、問題を出して答案を作らせ、学業や能力を判定するという意味での「試験」はすでに禅宗で用いられていたが、明治10年代に学校教育の普及とともに、*examine*、*examination*、*test*の訳語として広まった。また、幕末期、蘭学者が西洋の自然科学の基本が「試験」(実験)にあることを学び、そこから実験の意味で「試験」を用いた用例「其毒ヲ試験シ」(宇田川榛斎訳・宇田川榕庵校補・文政5年(1822)『遠西医方名物考』一)もある<sup>10</sup>。

中国語側は、黄河清らが編集した『近現代漢語新詞詞源詞典』(2001)は、「試験」の初出例として1889年に傅雲龍の『遊歴日本図経余記』を挙げている。『近現代辞源』(2010)では、黄河清が「試験」の初出例を1626年湯如望(アダム・シャル)『遠鏡説』の用例まで遡っている。1873年丁韞良(ウィリアム・マーティン)らの『中西聞見録』第13号、1875年林樂知(ヤング・ジョン・アレン)訳『格致啓蒙』も挙げている。

つまり、「実験」の意味での「試験」は明末清初に出現し、清朝末期までは外国人宣教師の著作において主に使われていた。ところが、日本において幕末期、蘭学者が使用することによって日本国内で広がり、清朝末期に日本から逆輸入されて、傅雲龍のような個人使用や、『実学報』のような新聞などによって中国で広がったと考えられる。

<sup>10</sup> 佐藤(2007: 362-363)を参照。

## (2) 「委員」

「委員」は大勢の人から選ばれて特定の事柄について審議したり、行ったりする人という意味で、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』には『清会典事例』（刑部、刑律、断獄、辨明冤枉）「另委別官審理者、專責委員、虚心質訊、毋庸原問官会審」と典拠が挙げられている<sup>11</sup>。一方、中国語側の『近現代漢語新詞源詞典』はそれより遅い用例が出されている。「在愛爾蘭国民教育委員監督下者、以千八百九十五年以来之統計如左、……」『欧米教育統計年鑑』（1911年孫世昌輯訳）<sup>12</sup>ただし、「漢籍電子文献資料庫」で検索したところ、「丁巳、初設海參崴委員」「命李經方為台湾交地全權委員」（『清史稿』）、「随密飭福州府陸福、宜福、協城守副將茹銑、遴委員弁、帶領兵役前往該處、將搭蔡在山僱工砍木之奸民、盡行擒拿」（『鼓山志』）など清の時代の用例があり、官職の一つであることを表す。

調べた結果、12語の中日同形語は全部中国語に典拠があり、近代において意味が変化し、いずれも研究者たちが注目し続けてきた言葉である。「試験」「計画」は幕末・明治初期に訳語として用いられ、「発見」「委員」も近代の新概念を表すが、中国語に語形があるため、二人の訳者には抵抗感が薄く、日本語の記事原文から受け継いだと考えられる。

## 4.2 程起鵬訳が原文と一致する語（句）

程起鵬の訳語が孫氏と異なり、原文記事と一致する語句は10語（句）であり、表5の通りである。逆に、孫福保訳は程氏と異なり、原文記事と一致する語（句）はない。なお、「清國」「技師」「會社」を例として具体的に説明する。

表5：程起鵬訳が原文と一致する語（句）

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
中國	清國	清國
派	派遣	派遣
礦師	礦山技師	礦山技師
一擔金砂	每礦一擔	鑛一擔に付き
該当なし	最上	最上
洋銀	金價洋銀	金價洋銀
官吏及紳民等. 集資	官民合資	官民合資
股本	株金	株金
公司	會社	會社

<sup>11</sup> 佐藤（2007：13）を参照。

<sup>12</sup> 香港中国語文学会（2001：271）

金礦脈 <sup>13</sup> 苗	金礦脈	金鑛脈
---------------------	-----	-----

### (1) 「清國」と「中國」

秦 (2010) によれば、当時「中國」という表現のほうが一般的であり、『時務報』ではほぼ完全に「中國」に統一されているのに対し、『実学報』では、日本語からの翻訳記事は「支那」「清國」を用い、それ以外の部分は「中國」を使用していると述べているが、「清国膠州湾」という記事と本稿で取り上げた二者の訳文を見ると、『実学報』では、孫氏は「中國」と訳し、程氏は日本語の影響を受けて「清國」と訳していることが分かる。

### (2) 「技師」と「礦師」

「技師」について、『明治のことば辞典』では、明治時代の新語とされ、明治 29 年『民法』第 170 条 2 項には「技師、棟梁及ヒ請負人ノ工事ニ関スル債権」とあり、北村透谷は『人生に相渉るとは何の謂ぞ』(明治 26) の中で、「然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、」と記している<sup>14</sup>。

中国語側の資料では、日本語からの借用語として、「技師」は英語 engineer の意識だ<sup>15</sup>とある。現代中国語には「技師」(技術人員の职称之一)と「礦師」(指勘察和采礦的工程技术人員)<sup>16</sup>の両方が残っているが、「技師」は日本語から借用された後、職名の一種になったのだろう。意味の面から見ると、「礦師」が日本語の「礦山技師」に相応しい訳語であると考えられる。程氏には日本語をそのまま残し、新語を積極的に使用する姿勢が見られる。

### (3) 「會社」と「公司」

中国語側の資料から見ると、『漢語外来詞詞典』には、日本語からの借用語として、「會社」は英語 company、corporation の意識だ<sup>17</sup>とある。また、『漢語大詞典』には、「會社」「①旧時指政治、宗教、学术等团体②公司。来自日语、为英语 company、corporation 的意译」<sup>18</sup>とあり、訳語として、日本語は「會社」、中国語は「公司」とそれぞれあるが、清末から程氏などが積極的に使用したことによって、「會社」は借用語から現代中国語となったのだろう。

以上のように、程氏は孫氏より積極的に外来のことばを受け入れる姿勢が伺える。言い換えれば、孫氏はできるだけ中国語に既にある語句を用いて、中国人読者に分かりやすく読んでも

<sup>13</sup> 原文では「金礦胍苗」である。「胍」が「脈」の誤字か。

<sup>14</sup> 惣郷ほか (1986 : 93) を参照。

<sup>15</sup> 劉ほか (1984 : 151-152) を参照。

<sup>16</sup> 羅ほか (1986-94 : 6-359, 7-1118) を参照。

<sup>17</sup> 劉ほか (1984 : 144) を参照。

<sup>18</sup> 羅ほか (1986-94 : 5-785) を参照。

らおうとする姿勢が伺える。また、孫氏は程氏より語学の資質がある程度高いことも示されている。

一方、二人の訳者の用語に関する傾向を詳しく見るためには、『実学報』の翻訳全体を調べなければならない。以上の3組の言葉について、「東報輯訳」欄と「東報訳補」欄の139本の訳文を調べた結果、各語の使用回数は表6の通りである。

表6：『実学報』における各用語の使用状況（回数）

語 訳者	清國	中國	技師	礦師	會社	公司
王宗海（王/孫）	1	8	0	0	11	0
孫福保	6	4	2	2	26	2
程起鵬	24	0	4	0	10	1

以上の数字で分かるように、中国語に既存の言葉をよく使用する孫氏にしても、日本語の新語である「技師」を用いたことがある。程氏が新しい表現を多用していても、中国語にある表現の「公司」も1回用いている。

新語を使用した用例として、「會社」を取り上げて見ると、孫氏が「會社」を26回使い、程氏より多く使用したことは例外であるかと思われるが、その理由は、孫氏の翻訳は程氏より多く、結果的に「會社」という語を訳語として使う頻度も高くなってしまったからであり、しかも一つの訳文に複数回用いているためである。例えば、第9冊「視察倉庫」には「會社」が10回も出現した。また、孫氏は新しい表現を使用する時、中国語の言い方も添えて説明する。例えば、「惟九州筋參考會社（即公司）之分店以外。另有一私家獨創之營業。所築倉庫。頗有高見」（『実学報』1991：540）などである。

#### 4.3 二者の訳文が原文とそれぞれ違う語

孫福保、程起鵬が用いた訳語と日本語の原文記事がそれぞれ異なって用いた用語は表7の通り2語である。

表7：二者の訳文が原文とそれぞれ違う語

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
今日	近来	近頃
辦理開采	招股	出張

日本語の読みから見れば、「ちかごろ」が和語であり、「しゅっちょう」は漢語であるが、「デハル」（出張）を音読みにした和製漢語で、よそへ出向くという意味が中世にあったが、仕事で

他の場所へ出向くという意味は明治以降のことである<sup>19</sup>。従って、2語は日本固有語と認識され、読者が分かりやすいように訳者二人は類義語を当てるか意識する方法を選んだ。

果たして、二つの表現が中国語にないか、『漢語大詞典』で調べてみた。

近頃：犹近来。中国近代史资料丛刊『辛亥革命・民报・驳「法律新闻」之论清廷立宪』、「余居日本、見其近頃對於此事、一般輿論所趨、強半背於事理、而尤加曲譽。」鲁迅『热风・「一是之学说」』、「此外还有一个太没见识处、就是遗漏了『长春』、『红』、『快活』、『礼拜六』等近頃风起云涌的书报。」

(『漢語大詞典』1986-94：10-735)

出張：謂打牌时出牌。老舍『四世同堂』十六、「她的肘、腕、甚至于乳房、好像都会抓牌与出張。出張的时节、她的牌摺得很响、给别人的神经上一点威胁。」

(『漢語大詞典』1986-94：2-496)

以上のように、2語が見出しとして立てられている。「近頃」の意味は日本語と同じだが、用例として挙げられているのは民国時期のもので、日本からの影響が強いと見なしている。「出張」の意味は日本語と全く違う。

また、当時の辞書記述はどうであったか、東亜語学研究会編『漢訳日本辞典』（1905年）を調べてみると、2語とも見出し漢字の右に傍線が付されている。

日本獨用之清國不用之例「相圖」「勘辨」「差支」「田植」「榊」「辻」「付込ム」等者、附一線于右傍以區別之。

(『漢訳日本辞典』1905:「凡例」)

日本でのみ使用され、中国で使用しない「相図」「勘弁」「差支」「田植」「辻」「付込ム」などは、右側に傍線を付けて区別する。(筆者訳)

上の『漢訳日本辞典』「凡例」から、2語が日本固有語であること分かる。故に、まだ日本語から影響をそれほど受けていない清末の二人の訳者が「近頃」と「出張」を訳す時、中国ですでに慣用されている言葉に替えたことが分かる。

## 5 文レベルの考察

『実学報』の「實學報啟」に見られる「本報繙譯東西書報、悉照原文、稍加潤飾、詞達理舉、總以不失本意為主」<sup>20</sup>の記述から、原文の内容を適切な表現に直し、正確に翻訳しようとした趣

<sup>19</sup> 佐藤（2007：426）、『語源由来辞典』<http://gogen-allguide.com/si/syuttyou.html> を参照。

<sup>20</sup> 『実学報』（1991：63）。本紙は東西（日本と西洋諸国）の著書と新聞を翻訳する。翻訳の際、少し手を加えるが、なるべく原文に忠実に訳す。また、適切な言葉遣いで意を尽くし、筋を通す。要するに、全体的に本来の意味を生かすことを重んじる。(秦訳)

旨が分かる。確かに両訳文は単独で見れば、いずれも日本語原文記事の主旨は見て取れるが、具体的な状況がどうであるかは、原文と比べないと分からない。本節では、日本語原文と対照しながら、文単位で二者の訳文の正確性や、原文への忠実度、文体上の対応を見てみよう。

### ① 受動態を能動態への変換

原文：広東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師

孫訳：廣東省城地方。現派礦務委員莊鶴清。及聶楊二礦師。

程訳：廣東省城派遣礦務委員莊鶴清。及聶 楊兩礦山技師。

受動態である「派遣せられたる」は二者の訳文でともに能動態に直された。中国語の最も大きな近代的变化として、叙述アングルの多様化、いわゆる受動文の発達が挙げられている<sup>21</sup>。二者の訳文が共に受身表現を能動態に直したのは、当時は日本語の影響が薄く、中国語に受身表現がまだ発達していなかったからであろう。

### ② 原文への忠実度

原文：一行は徳慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を發見したる由なる

孫訳：同往徳慶州開建縣之湧流地方。於此有精良之金礦脈發見。

程訳：昨於徳慶州開建縣之湧流地方。視察金礦脈之發見。

文節の配列から見れば、孫訳は原文と同じ順序である。そのために、長い訳文の回避か、或いは原文の追従かの理由で、長い修飾成分が附いている「徳慶州開建縣管下の涌流地方」を目的語として、動詞「同往」を加え、一文にした。そして、「於此」でそれに代わってもう一つの短い文を構成したのだろう。一方、程訳はその文を中国語の順に直して、一つの長文になった。

また、孫訳が原文通りに動詞に訳したのに対し、程訳では元々動詞であった「發見」を名詞に変換し、それに対応して動詞「視察」を加えた。動詞の添加の点では、二者が共通だが、文節順序と品詞が原文と同じで、原文への忠実度が高いのは孫訳だろう。

### ③ 訳文の意味伝達の適切さ

原文：試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り

孫訳：試驗礦質之所含真金。約計一擔金砂。可值洋銀五十圓。

程訳：已得試驗確實。每礦一擔。最上當得金價洋銀五十圓。

この文に関しては、「試験の結果」をはっきり分からせるように、二者の訳文はともに「潤色」した。孫訳は「純金の含有率」という試験の内容を、程訳は「確実な結果を得た」という試験の結果を追加した。

<sup>21</sup> 沈 (2010: 16) による。

また、程訳の「礦一擔」「當」は原文を忠実に訳したが、「已得～確實」は日本語原文にないもので、「每礦一擔」は炭鉱が多数あって、いずれも「一擔」を取ると違う意味になるので、孫訳の「礦質之所含真金」「一擔金砂」「可値」の方が中国語として分かりやすく、原文の意味を正確に伝え、適切な訳文であろう。

#### ④ 訳文の正確さ

原文：同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員及技師は再び同地方に出張したる由

孫訳：現由廣東同省官吏及紳民等。集資合成股本洋銀三十萬圓。設立公司。經營計畫。再由該委員及礦師同至該礦地方。辦理開采。

程訳：已由該省當差之官民合資。先以株金三十萬圓。為計畫會社之費。再由該委員及技師。向該地方招股。

まず、和語の副詞「差當り」に対して、孫氏が本当に理解できたか分からないが、「現」に訳すのは妥当である。一方、程氏は動詞「當差」と訳したのは理解できなかったからだろう。しかも、「當差之官民」という表現は、中国語として「官」(官吏)と「民」(民衆)が対義語であるので、「當差之官」の言い方はあるが、「當差之民」は通じない。なぜなら、「民」が官職に就くことがないからだ。孫訳の「官吏及紳民」のほうが正確かつ適切であろう。

また、前節にも挙げたように、程訳では「官民合資」「株金」「會社」と原文と一致するのに対し、孫訳では「集資」「股本」「公司」と中国語に既存の言葉に変えて、読者にも分かりやすくなっている。

さらに、程訳の「先以株金三十萬圓。為計畫會社之費」「再由該委員及技師。向該地方招股」は、字面から見ると、原文には近いが、2文ともお金についての話になっている。孫訳のほうは「設立公司。經營計畫」「辦理開采」と「潤色」したにも関わらず、原文の「會社を組織する計畫」「出張」の意味を正確に訳したと言えよう。

#### ⑤ 句読点の箇所による原文の解釈

原文：尚廣西之蒼梧縣に連互して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

孫訳：又廣西蒼梧縣連亘之湧北卡。水黎。老金雞山等地方。一帶均查有金礦。甚為富足云。

程訳：又廣西之蒼梧縣。連互涌北卡。水黎老金。雞山等地方一帶。均金礦為極富云。

上にも挙げたように、この日本の新聞記事は句読点を付けない方針があり、原文に句読点があるのは冒頭の「聶、楊兩礦山技師」とこの文のみである。中国語訳はすべて「。」で文を区切っている。日本語原文の「涌北卡～地方一帶」はその地域全体の意味を表す名詞として、「連互」「富めり」の主語になる。孫訳の区切り方によれば、「一帶」はその前の「廣西蒼梧～等地方」

を指し、一帯以下の文章「均査～富足云」の主語である。一方、程訳では「蒼梧縣」と「一帯」の後ろに2ヶ所句読点が付けられ、「廣西之蒼梧縣」が後ろの2つの叙述部の主語になる。「均」の意味「皆、一様、等しく」を合わせて見ると、主語が「廣西之蒼梧縣」「浦北下～地方一帯」である。孫訳と比べると、程訳は原文の文章構造に対する理解に正確性が欠けているが、原文の主旨は概ね理解していたと考えられる。

以上の考察から見ると、漢字と語彙の面では程訳が原文に忠実的であるが、文単位では孫訳が正確かつ適切に施され、中国人読者に分かりやすくしている姿勢は伺える。

## 6 二人の訳者について

孫福保の社会的地位については、『実学報』第四冊「本館告白」の記載によると、「師範学堂教誦之職」であると分かる。

「一 本館舊擬延請孫君玉如任撰述編校之事。因孫君有師範學堂教誦之職再三相辭。但允所輯之書錄送本館。今本館另行聘訂、一時實難。其人仍央向學堂開去此缺、以資襄理」

(『実学報』1991:273)

「一 本館は以前から孫玉如氏に撰述、編集の仕事を委ねた。しかし、孫氏が師範学堂教師の職にあったために、何度も辞意を表された。ただし、氏の編集した書誌を本館に送って頂くようお願いした。今、本館は改めて招聘致しますがしばらくの間まことに難しい。氏にはやはり学堂を辞職して総撰述の力になって頂きたい。」

この「孫君玉如」は孫福保氏である。第一冊「本館告白」の「本館弁事諸君」の名簿が裏付けている。孫氏は総理、総撰述の次、三番目に挙げられ、高い地位に置かれていることも分かった。

「本館辦事諸君：總理吳縣王仁俊幹臣、總撰述餘杭章炳麟、撰述編校吳縣孫福保玉如（略）」

(『実学報』1991:70)

また、呉(2003)では、孫福保が「武備学堂中学教習」で、月給30両と述べている。具体的な時間と場所などが記載されていないが、「先生」であったことが確認できよう。

孫氏は最初から撰述者として仕事を引き受けたため、『実学報』「実学通論」欄に氏の撰述した文章「論变法之権」「均財」などが11本ある。のちに、孫氏は『実学報』日本語翻訳の仕事も受けた。また、上海農学会の『農学叢書』の中に、『植物近利志』『吳苑栽桑記』(清・孫福保撰)の2巻がある。

程起鵬の身分及び職業について、中国語側の『中国人名大辞典』(1949)、『中国文化界人物総鑑』(1982)、『当代四千人名録(増訂版)』(1978)、『中国歴代人名辞典(増訂本)』(1989)、『中国人名大辞典』(1980)では全く言及されていない。支那研究会編『最新支那官紳録』(1919)

には、

程起鵬 江蘇省呉縣人<sup>22</sup> 前清の挙人にして京師初等檢察庁檢察官に任用せられ、民国成立後浙江省江山縣知事に転任せり、六年十二月現在仍ほ該職に在り。

(『最新支那官紳録』1919:558)

という短い紹介のみあって、清末の知識人で、政府の役人であることが分かる。

二人の訳者の日本語学習歴についての言及はいまだ見つかっていない。前節の訳文の漢字、語彙の使用の面において、程氏は孫氏より積極的で、訳語の使用には日本語からの影響が強いことが伺える。しかし、文単位での考察から見れば、教師である孫氏は国語と日本語能力のレベルが高く、原文への理解度も深く、忠実に原文の主旨を伝達できたうえ、訳文も中国人読者に分かりやすい。逆に、程氏のような訳者や作者が、近代において大量の新語や新しい表現形式を中国語にもたらしたと言えよう。

## まとめ

以上、日本の新聞記事と『実学報』に掲載された孫福保と程起鵬両氏による中国語訳を取り上げ、漢字、語彙表現、文レベルから比較・分析を行い、以下のことが分かった。

まず、日本と中国の新聞における漢字表現上、①旧字体を使うのは共通であり、孫福保による俗字や異体字の使用や、日本語原文の中の異体字の共用現象がある。②訳者の漢字の使い方がそのまま当時の新聞の漢字の使用状況に反映されている。③日本独自の外来語に当てた漢字表現「弗」は中国語の単位に直す。④日本語と中国語において「鑛」と「礦」が別れる傾向があり、現代日本語の「鉦」と中国語の「矿」へと変化する漢字使用の過程も見られる。

そして、語彙表現上判明したことは、程訳には日本語原文と一致する語が多く、程氏が孫氏より日本語の使用に積極的で、中国古典にある表現だけでなく、日本語の新語も受け入れる傾向があることである。ちなみに、この違いの原因を追究するためには、『実学報』の刊行や翻訳の方針に変化の有無について詳しく調べる必要があると考えられる。

また、文単位では、①両訳者はともに受動態を能動態に変換し、当時の中国語は受動態が発達していないことが分かった。②文の配列順序や適切な中国既存語への変換など、孫氏は国語能力が強く、できるだけ原文に忠実に、適切な翻訳をする姿勢が伺える。③孫氏は原文日本語への理解度が高く、忠実に原文の主旨を伝達できたうえ、読者にも読みやすい翻訳ができたと言える。

翻訳の読解の容易さでは孫氏が優るが、近代中国に於いて大量の新語や新しい表現形式が中国語にもたらされたのは、程氏のような新しい言葉や表現の導入に積極的な訳者や作家がいたからだと言えよう。今後『実学報』の訳文全体を網羅し、二人の用語の使い方を分析する必要

<sup>22</sup> 清末の呉県、長洲県、元和県が1912年1月に呉県に統合されたため、本書では呉県出身とした。

がある。また、『実学報』の翻訳方針や、翻訳によって中国社会、中国語にもたらした影響なども明らかにしたい。

参考文献：

- 呉劍杰 (2003) 「論張之洞湖広任内的外才引進」『武漢大学学报』(56-2) pp.185-193
- 黄河清 (2010) 『近現代辞源』上海辞書出版社
- 佐藤亨 (2007) 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 実藤恵秀 (1940) 『日本文化の支那への影響』蜚雪書院
- 支那研究会編 (1919) 『最新支那官紳録』北京.支那研究会
- 朱京偉 (2015) 『訳書彙編』(1900-1903) 中的二字日語借詞『漢日語言対比研究論叢』第6輯 pp.48-60 華東理工大学出版社
- 沈国威 (2010) 「中国語と近代——東アジアの言語環境における思考」『関西大学外国語学部紀要』第2号 pp.13-22
- 沈国威、内田慶市、熊月之、王揚宗 (1998) 「欧化国家を目指せ：情報発信基地としての19世紀日本—日本新聞の中国語訳を通して見る近代日中語彙交流」『財団法人松下国際財団研究助成・研究成果報告書』
- 秦春芳 (2008) 「中国近代新聞と日本新漢字語の導入——日本語記事『清國膠州灣』の中訳を例として」『或問』(15) pp.109-124
- 秦春芳 (2010) 『実学報』に見える近代中国語の日本漢字語借用』『国文学攷』(205)pp.1-13
- 惣郷正明、飛田良文編 (1986) 『明治のことば辞典』東京堂出版
- 陳静静 (2017) 「近代日本新聞の中国への導入について——『実学報』「東報輯訳」「東報訳補」欄の場合」『北海道大学文学研究科研究論集』17号 pp.67-82
- 西田長寿 (1961) 『明治時代の新聞と雑誌』至文堂
- 香港中国語文学会 (2001) 『近現代漢語新詞詞源詞典』漢語大詞典出版社
- 劉正燾、高名凱、麦永乾、史有為 (1984) 『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社

使用テキスト、辞書類、データベースなど：

- 『実学報』(復刻版) (1991) 中華書局編輯部編 北京.中華書局
- 『中外商業新報』(復刻版) (2002) 柏書房
- 『大字典』(普及版) (1965) 講談社
- 『大広益会玉篇』(影印版) (1987) 中華書局
- 東亜語学研究会 (1905) 『漢訳日本辞典』吉川弘文館
- 羅竹風ほか (1986-94) 『漢語大詞典』上海辞書出版社
- SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース 2015 版 <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>

『漢典』 <http://www.zdic.net/>

『語源由来辞典』 <http://gogen-allguide.com/si/syuttyou.html>

『漢籍電子文献資料庫』 <http://hanji.sinica.edu.tw/>

付記：本論文は中国国家留学基金管理委員会の支援による研究成果の一部である。本論は近代日本語研究会・第 345 回研究発表会で口頭発表を経て、修正・加筆したものである。その場で飛田良行先生をはじめ、先生の方々に貴重な意見を頂いた。記して感謝の意を表致す。

附図：(1) 孫福保訳文

廣東金礦發見

近日中國廣東省城地方現派礦務委員莊鶴清及聶楊二礦師同往德慶州開建縣之湧流地方於此有精良之金礦瓜苗發見試驗礦質之所含真金約計一擔金砂可值洋銀五十圓最下者每擔亦值七八元現由廣東同省官吏及紳民等集資合成股本洋銀三十萬圓設立公司經營計畫再由該委員及礦師同至該礦地方辦理開采又廣西蒼梧縣連亘之湧北卡水黎老金雞山等地方一帶均查有金礦甚為富足云

(2) 程起鵬訳文

廣東金礦之發見

近來清國廣東省城派遺礦務委員莊鶴清及聶楊兩礦山技師昨於德慶州開建縣之湧流地方視察金礦脈之發見已得試驗確實約每礦一擔最上當得金價洋銀五十圓最下亦得金價洋銀七八圓已由該省當差之官民合資先以株金三十萬圓為計畫會社之費再由該委員及技師向該地方招股又廣西之蒼梧縣連亘湧北卡水黎老金雞山等地方一帶均金礦為極富足云

「廣東金礦發見」 『実学報』 第六冊/363-364 頁 吳縣孫福保譯 東報輯譯欄

譯中外商業新報西 9 月 14 日

今日中國廣東省城地方。現派礦務委員莊鶴清。及聶楊二礦師。同往德慶州開建縣之湧流地方。於此有精良之金礦瓜苗發見。試驗礦質之所含真金。約計一擔金砂。可值洋銀五十圓。最下者。每擔亦值七八元。現由廣東同省官吏及紳民等。集資合成股本洋銀三十萬圓。設立公司。經營計畫。再由該委員及礦師同至該礦地方。辦理開采。又廣西蒼梧縣連亘之湧北卡。水黎。老金雞山等地方。一帶均查有金礦。甚為富足云。

「廣東金礦之發見」 『実学報』 第十四冊/873-874 頁 長洲程起鵬譯 東報譯補欄

譯中外商業新報西 9 月 14 日

近來清國廣東省城派遣礦務委員莊鶴清、及聶 楊兩礦山技師、昨於德慶州開建縣之涌流地方、視察金礦脈之發見、已得試驗確實、每礦一擔、最上當得金價洋銀五十圓、最下亦得金價洋銀七八圓、已由該省當差之官民合資、先以株金三十萬圓、為計畫會社之費、再由該委員及技師、向該地方招股、又廣西之蒼梧縣、連互涌北卡、水黎老金、雞山等地方一帶、均金礦為極富云。

(3) 日本語記事原文

**● 廣東金礦の發見**

近頃清國廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金礦脈を發見したる由なるが試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を爲し該委員及技師は再び同地方に出張したる由、尙廣西の蒼梧縣に連互して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

「廣東金礦の發見」 『中外商業新報』 明治 30 年 9 月 14 日 2 頁（振り仮名を省く）

近頃清國廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金礦脈を發見したる由なるが試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を爲し該委員及技師は再び同地方に出張したる由、尙廣西の蒼梧縣に連互して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ